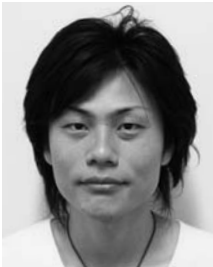


## 人間万事塞翁が馬

小池貢史（宮崎大学農学部獣医学科6年）



子供の頃、よくテレビで動物番組を観ていた。家では祖母があまり動物を好きではなかったからペットは飼えなかった。しかし私は動物が大好きだった。

隣の家には犬がいて、よく一緒に遊んだ。その犬に一度、手を咬まれたことがあった。まだ幼稚園に

入るか入らないかの頃、エサを食べていたその犬がもっと食べやすいように、容器を近づけようと手を伸ばした。その瞬間、右手に激痛が走った。血が出たかどうかは覚えていないが、近くにいた父に泣きついたことは覚えている。その時父は「食べている時に手を出したお前が悪い。きっとエサをとられると思ったんだ。」と言った。子供ながらに、その理屈はよく理解できた。その頃は、ただただ単純に動物が好きで、動物に触れたくて、テレビで観るような場所へ行きたいと思っていた。

中学に上がる前、高校生だった姉が、「動物のお医者さん」という漫画を貸してくれた。動物好きではあったが、動物を飼ったことがなかった私は、その時初めて獣医さんという職業を認識した。と同時に、漠然と獣医師に憧れるようになった。

中学3年の進路決定の際、父にこう訊かれた。「まだ何がしたいとかよくわからないだろうけど、どんな仕事がいい？」私は恥ずかしかったが、「獣医師になりたい。」と答えた。憧れは、いつしか夢へと変わっていた。父は、「獣医師か、難しいぞ。」とだけ言って、賛成も反対もしなかった。

私は高校でも、特に何かを成し遂げたわけでもなく、平凡な高校生活を送った。しかし、夢だけは変わってなかった。高校卒業後、1年のブランクを経て予備校に通うこととなった。もともと勉強が好きではなかった私は、当時こんなことをよく思っていた、「受験勉強なんて社会に出て何か意味があるのだろうか…。自分のやりたいことならいくらでも勉強するだろうに。」その後かなりの遠回りをして大学に入学した。だが、それは残念ながら、念願だった獣医学科ではなかった。大学に通いつつも、夢を諦め切れなかった。もう一度受験するつもりだった。そんなある日、大学の掲示板に転学科の募集があること

を、当時同科だった友人が教えてくれた。しかし、聞く話によると、今まで獣医学科に転学科できた人はおらず、他学科の募集に合わせた形式的なものらしいとのことだった。そのため、「もしかしたら…」という僅かな期待も持たず、ダメもとで受験してみることにした。受験したことすらも忘れかけていた頃、教務から結果を取りに来てほしいと連絡があった。私は一緒に受験した友人達と3人で教務を訪れ、茶封筒を受け取った。先に開封した友人達2人は、やっぱりという感じで笑っていた。私も開封してみたが、どこに不合格と書いてあるのかわからなかった。友人達にどこに不合格と書いてあるのかとさえ尋ねた。私は思わぬ形で、夢に一步近づくことができた。

「ダメもと」という言葉が好きになった。獣医学科への編入は、2年次からであった。そのため、1年と2年の講義を同時に受講しなければならなかった。毎日が忙しく、講義のコマは、ほとんど埋まっていた。試験勉強も山のような量だった。それでも、自分がやりたかった勉強は、まったく苦にはならなかった。ダメもとという言葉が、私を強くしてくれたのかもしれない。ダメもと精神は、私に努力が必ず報われるということも教えてくれた。最終学年となり、知識と実践が徐々に結びつきつつある。後輩もそれなりに指導できるようになった。その上で、私が予備校時代に考えていたことは、どうやら正しくないらしいということがわかってきたように思う。受験勉強は思わぬ形で役立っている。幼い頃より、私は勉強が好きではなかったが、物事の理屈を理解することは得意だった。それは、隣の犬に手を咬まれた頃からそうだったのかもしれない。幼い頃の経験は、予備校時代の苦労を経て、物事の本質を理解し、様々な事を関連付け、あらゆる角度から可能性を考慮するという思考方法に結びついている。また、自分のやりたい勉強でも、やる気がなければ身に付かないこと、時には壁にぶつかり試行錯誤することで身に付くことがあるということも実感する。

人間万事塞翁が馬。人生において、何が良いことで、何が悪いことかはわからない。遠回りすることで得られることも多くある。私は同級生よりも幾分、遠回りをしてきたが、無駄なことはなかったと自信を持って言える。夢を持ち、信念を持ち、努力し続ければ、必ず報われるものだと、今なら胸を張って言うことができる。

† 連絡責任者（担当教官）：萩尾光美（宮崎大学農学部獣医学科獣医外科学教室）

〒889-2192 宮崎市学園木花台西1-1 ☎・FAX 0985-58-7279 E-mail: mhagio@cc.miyazaki-u.ac.jp